神様、怨みます

ますの　こたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様、怨みます

【Ｎコード】
Ｎ６３７３Ｉ

【作者名】
ますの　こたろう

【あらすじ】
嗚呼、神様。わたしを助けて。退部届を与えて。汚い心を与えて。死を与えて。もうすべてが煩わしくて、嫌。神様、神様・・・。

（前書き）

文章がどうのこうのというよりか。
何かストーリーぐちゃぐちゃです。

最後まで読んでいただけたら幸運ぐらいの・・・。

嗚呼、神様。
お願いします。もう止めて。
辛いです。苦しいです。
こんな針のむしろで、神様、わたしはどうすればいいですか？

＊

事の発端は、わたしの発言だった。2年生も半分過ぎ先輩も引退した為、わたしは部長になった。嫌々なった部長ではあったが、所属する文芸部は嫌いではなかったので一応頑張る気はあった。副部長には1年で同じクラスだった崎口さん。わたしは好きではなかった。まわりからは「かわいい」「おとなしい」とか言われる子だ。わたしはそういうところが気に食わないのではなく、崎口さんは人として気に入らなかった。「かわいい」という言葉に「そんなことないよ」ではなく、ただ下を向いてもじもじするところや、他の部員に接する態度とわたしへの態度がまったく違うところだ。まわりの人にはおとなしく見せ、わたしにはそれとは違う印象を持たせた。
この子と協力できるだろうか、不安はあった。

＊

神様、こんなわたしを知ってる・・・？
苦しんでるわたしと、
平気に見せるわたしと、
弱いフリで身を守るわたし。
あと、あなたに助けと許しを乞う無様で惨めなわたし。
いろんなわたしを見て、どうですか？可哀そう？
わたしって、人からどんな目で見られているんでしょうか・・・？

＊

問題は、すぐ起こった。

惰性で部活を続ける同級生達。部室に来て寝るだけ、携帯をいじるだけ、ギャンギャン喋るだけ。真面目に活動をしているのは、わたしと一年生だけなのだ。あぁ、苛つく。こんな人間達の為に矢面に立つのはこの、嫌々部長になったこのわたしであることも。

みんなこの部活に望んで入ったのだ。入ったはずなのだ。なのにこの目も当てられない現状は何だ。活動の意味を見えなくしているものは何なのだ。崎口さんは何もしてくれない。それどころか、ギャンギャン喋っている人達に混じり一緒になってギャンギャンしている。

不安は的中した。悲しいことに、神様はわたしを裏切ってはくれなかった。

＊

あのときだけは、あなたに裏切ってほしかった。

一つ、気になることがあるのです。

もし、あなたが居なければ・・・もし神様が存在しなければ。

事態はいい方向に転がった？

それとも、逆ですか？

＊

「いい加減、真面目に活動してほしい。」・・・わたしは痺れをきらして2年生の全員に言い渡した。本心からきた言葉であれば、もっと激しかったろうと思う。気持ちを抑え付けた。わたしは正しいわたしは正しいわたしは正しい・・・。心の中で途切れることなく呟きながら。

目の前に居る2年生5人が、声をたてて笑った。

「うち等、こうじゃないと部活来れないんで。」

「部活来れなかったら、学校も来れないし。」

「楽しくないし。」
一番はじめに笑い、一番はじめにわたしに反駁したのは崎口さんだった。わたしは裏切られたと感じた。裏切ってほしかった神様にではなく、崎口さんに。神様も崎口さんも、もしかしたら全然人の役に立つことなんてないのかも知れないと思った。あと、どちらもすごく卑しい”人間”であるという確信が微かに生まれた。

＊

神様、あなたは”人間”なの？
卑しい部類に入る”人間”？

それでもいい。崎口さんと一緒でも。

あなたがわたしの心の支えであるうちは。

＊

わたしはその次の日から部内で孤立化した。もともと孤立化していたようなものだった。でも、そこにはわたしを受け入れてくれる空気があった。それがなくなった。
わたしは少し悲しくて、職員室からのおさがりでボロボロのワープロの陰でみんなには見えないようにして少しだけ泣いた。目から小さい涙の粒が滑り落ちたとき、1年生の一人と目があった。何か言われる、わたしはそう思った。でもその1年生はすぐ視線を逸らして古いワープロにむかった。
その突き放したような優しさにわたしが触れたのは、最初で最後だったかも知れない。幸運だったのかそうでなかったのか、それも知らない。

＊

神様。
少しの幸運を、ありがとう。

＊

わたしは、部活に行かなくなった。完全な無断欠席をしたのは人

生で初めてだった。でも、もうあんな場所に行きたくない。二年上の先輩が神聖なる場所だと言っていた部室は、わたしにとっての地獄だった。他の2年生にとっての楽園かも知れないというのは、分かりたくなくても分かった。

今頃、あの小さな地獄はどうなっているのかわたしは気がかりだ。部室の隅で小さくなって1年生はワープロに向かっているはずだ。でもその間で視線が飛び交うのだろう。「先輩どうしたんだろーね。」「やっぱキツいんじゃないの？」そして困ったような「わたし達に関係ないんだよねぇ？」そう、1年生には関係ない話。あなた達のことならわたしも矢面に立ってあげられる。

先生に言うことも考えはした。でもそんなこと、意味のないことだと直感が告げた。文芸部の顧問は学校の常勤教師の中ではあまり頼れると言い難く、むしろ評判の悪い先生だった。下手に相談しては余計にはなしがこじれて収拾がつかなくなりそうだ。

わたしが学校に行く理由は文芸部員の一人もいない教室の為で、それ以外なかった。仲のいい子は相談に乗ってくれたりしてくれた。それがわたしの中では更なる悩みになるとは思いもよらずに。

＊

神様、空の上は楽しい？

いいところ？

そこで何をして過ごすの？

わたしのことを観察はしてないことは分かってる。

考えてもいないことだって。

でもいいの。

いつか、何か役に立ってもらうことも、あるでしょうから。

＊

どこから漏れたのか、考えたくもない。そんなことを言いながら多分1年生か友達の中のお人よしだろうと見当をつける自分が嫌だ。その日、電話がかかってきた。家の電話だったので誰からだろうと

不思議だったが、なんと学校からだった。それもあの頼れない顧問から。
知っている、と開口一番に言った顧問の声に一瞬悪寒が走った。部活に来ない理由もどんな経緯だったかも知っている・・・そう言った声に感じた悪寒はとても耐えがたく、わたしは黙ったまま震える手で受話器を置いた。それから再び電話がかかってきたが母に頼み、居留守を使った。伝言として退部届がほしいと伝えてもらった。
次の日からわたしは顧問から逃げ続けた。なんだかすべてが煩わしかった。毎日学校へ行くことも、部活のことで悩むことも、普段の生活も。

＊

神様、誰だったのかわたしに教えないで。
失望したくないから。
悲しくなるのも、嫌だから。

でも一つだけ分かってるのは・・・
崎口さんでないことだけ。

＊

話し合いを開くことになった。顧問が要らない世話を焼いて無理やり開いた。わたしは行かないと言ったが、顧問は来たら退部届をやる、みんな待っている、とわたしを言いくるめて連れてきた。しかし、すべては嘘だったとすぐに分かった。全員見るからに乗り気ではなく、わたし以上に嫌がっているようにさえ思えた。先生はそんな場の空気を重く感じたのかすぐ「あとはみんなで解決するように。」と言い置いて部室から出て行った。
わたしは、何も言わなかった。人数比でいえば向こうが先に何か言うのが妥当であるはず・・・わたしは甘かった。
「なんであんたの為に話し合いなんか開かなきゃいけないの？」
話し始めたのは崎口さんで、明らかにわたしを見下している言い方だ。少し鼻にかかった変な声。

「じゃあ、取りあえずそっちの言い分から聞くんでー。」
わたしに話が振られた。
わたしは話した。みんなが喋っていたことによって苛々していたこと、笑って謝りもしない態度に内心すごく怒っていたことも。
わたしの話の途中で先生が部室に入ってきた。
「で、お前等は謝らなくていいのか」
先生はあの人達に促した。「謝れ」ではなく「謝らなくていいのか」・・・わたしはやっぱりこの先生が嫌いだ。
「えぇー、謝らなきゃいけないんですかぁ。」
語尾をあげていう言い方にまた苛々した。
「ごめんなさぁい。」
5人で笑いをこらえながら言われた。顔を見合わせて既に吹き出している子も居る。
「他には。何か、言うことないのか。」
先生が再度促す。
「じゃあ・・・先生外出といてください。生徒だけで話すんで。」
先生は嬉しそうに笑っていた。
「おぉ、分かった分かった。じゃあ頑張れよ。」
何を誰が頑張るのだ。
「まず・・・」
わたしもここから出て行きたい。
「部活来ないで欲しいかなぁ。あんたうざいし。部長面してんのも正直迷惑。偉そうで。」
お前等がわたしを推したのだ。自分がやりたくないが為に。
「部での雰囲気が、あんた居ると壊れるんだよね。みんな楽しくやってんの。邪魔されるとかやっぱ空　気がさぁ・・・あんた拒否っちゃってるかんじ？」
わたしは黙って出て行った。

＊

神様聞いてた・・・？

空の上で何をしてるの？

ねぇ、わたしは間違っていなかったでしょう？
正しかったでしょう？
だって、当たり前だから。
だからそうしてはいけなかったの？
あの惰性の塊を突き放してはいけなかった・・・？

神様はそれでも何も答えないのね。
意地悪な神様。
わたしは、あなたを怨みます。
もし助けてくれるのなら、
退部届か、
あの人達に混ざれる汚い心か、
わたしに死を、
与えてください。
どれか一つでいい。
お願いします・・・！！

＊

神様はわたしに死を与えてくれるようだった。
一つは役に立った神様。
ありがとう。

激昂、したフリをした。意外と簡単でびっくりした。少し、神様に感謝した。
「ねぇ＊＊達が放課後屋上来てって。」
同級生の女の子が伝えに来た。嗚呼、この子に罪はないのだ。唐突に悟る。
わたしは笑顔を作った。
「分かった。じゃあ、行くって伝えてくれる？」

女の子は少し安心したように、うん伝えるからね絶対行ってね文芸部の子達待てるって言ってたんだよホントだからねと、くどいように念を押した。

＊

神様、あの女の子には、本当に罪はなかったでしょう？
それくらい分かるの、わたしにだって。

神様。
もうすぐ逢えますね。

＊

屋上に崎口さん達は待っていた。いつも通りギャンギャン喋りながら。
「ねぇ、来たよ。ほら、あいつ。」
嗚呼、この人達には罪があるのだ。罰を与えるのが、わたしの最期の仕事。人としても、部長としても。
「何か、用？」
できるだけあの人達から離れた。声が聞こえるギリギリの範囲。
わたしが何をしようと止められないように。
「いや、別にぃ。ただあんたがうち等のこと避けるから理由聞きたいなーって思っただけ。」
わたしが、避けてる？
「何でうち等が避けられてんの？意味不明なんですけど。」
わたしだけに、罪があるの？あるの？あるのあるの？
「何で避けられてるのかも分かんないの？何でわたしが避ける　か？
当たり前じゃんか。普通性格否定されて、自分の所為で空気壊れるとか言われて次の日から何もなか　ったみたいにしてヘロヘロ挨拶とかできると思った？」
向こうの反応は見ない。死ぬ前に失望はいらない。
わたしはポケットからくちゃくちゃの紙切れを出してあの人達の方へ放った。

「何、これ。」
拾い上げる気配がした。
「遺書だから。」
わたしは既に屋上の柵を越えていた。向こうからの反応は、ない。
「それ好きにして。死んだらいろんな人に見せてまわってね。」
靴を脱いで揃えた。最期にあの人達の方を少しだけ見る。

＊

神様。
あなたがわたしに最期に見せるのは何だったのか。
あの人達の驚いた顔だったの？
他に在るなんて、言わせは、しないけど。

＊

あの人達の驚いた顔がわたしの最期では、なかった。
嗚呼、何でわたしは死ねなかったのか。悔しい。
わたしは搬送された病院で寝かされる。薬を飲まされ、検査をされる。何もかもが面倒なのは変わらず、そんなところで死ねなかったわたしを怨む怠惰なわたしが顔をだす。

＊

神様、何でわたしは死ねなかったの？
心の底から死にたかったのに。
わたしは結局最期に何を見るの？
そのときまで、何を見続けるの・・・？
神様、怨みます。
わたしを殺してくれなかったあなたを。
お願い、怨むななんて言わないで。

わたしに他の人を怨ませないで・・・！

＊

わたしは神様に宛てた出せない手紙を書く手を止めた。分かりきっているのに止められない。何かの中毒症状かもしれないほど。

＊

神様、あなたにわたしが逢える日はいつ来るの？

＊

遠くの空で稲妻が走るのを、片方になった目で見た。

神様・・・？

これはどういう返事なの？

fin

（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

一応実話をもとにしたフィクションというやつです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6373i/

神様、怨みます

2011年1月19日21時37分発行